

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370955

研究課題名(和文) タイにおけるタトゥーの魅惑と暴力をめぐる人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study of Enchantment and Violence of Thai Tattoos

研究代表者

津村 文彦 (Tsumura, Fumihiko)

名城大学・外国語学部・教授

研究者番号：40363882

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では現代タイにおけるタトゥーの社会的布置と動態を分析した。サックヤンと呼ばれるタイの伝統的タトゥーは、僧侶などの宗教専門家によって、特別な文字と図像を身体に刻むことで呪術的な力を発揮するとされる。しかし現在ではファッション目的でサックヤンが用いられ、西洋の意匠が多く導入されている一方で、50年以上前からタトゥーが呪術でなく装飾のためにもしばしば用いられていた。タイのタトゥーをめぐる様々なフィールドデータより、魅惑と暴力という両義的な力こそがタイのタトゥーのもつ特徴であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to analyze the social meanings and changes of tattoos in modern Thailand. Thai Traditional tattoos, called sakyan, are said to have magical power by inscribing special spells and figures by the hands of religious specialists like Buddhist monks or Brahmin priests. However, while sakyan is tattooed for the purpose of fashion, traditional tattoos were used not only for magic but also for body decoration. From the collected field data it is clarified that Thai tattoo has ambivalent powers of enchantment and violence which sustain the tattoo culture of Thailand.

研究分野：文化人類学

キーワード：東南アジア タイ タトゥー 呪術 宗教 身体

## 1. 研究開始当初の背景

タイ王国におけるタトゥーの社会的布置を問う本研究は、(1) タトゥーと身体変工、(2) 東南アジアの書承文化、(3) 東南アジアの呪術研究を背景とする。(4) 研究代表者のこれまでの研究関心、の4つの背景をもつ。

(1) **タトゥーと身体変工**については、19世紀末の人類学勃興期以降、太平洋・オセアニア域を中心に多数の記録が蓄積されてきた。しかしタトゥーは「未開」や「異文化」の象徴とされ、博物学的な記述ばかりであった。現在も同様の関心は継続し、タトゥーの意匠集が多く出版されている。人類学的研究としては、タトゥーの幾何学的図案から社会構造を抽出するもの[レヴィ=ストロース 1972]、図案と人との相互関係を分析するもの[Gell 1998]もみられるが、それらはタトゥーを工芸・美術の一部として対象化するだけで、それ自体を中心的な分析対象としてこなかった。近年では、タトゥーをアイデンティティの現代的表象と読み解くものもみられるが[Kuwahara 2005]、太平洋地域では男性性と伝統文化の復興、欧米地域では若者文化やサブカルチャーの文脈で論じられることが多いが、東南アジアのタトゥーの複雑な社会的動態はあまり論じられてこなかった。

(2) **東南アジアの書承文化**は、「西洋世界では文字の文化が声の文化に優越する」というオングの議論[1991]へのアンチテーゼとして地域の特性に根ざした研究が進んだ。近年の研究[Kashinaga (ed.) 2009]では、東南アジアにおいて、文字と音声は必ずしも乖離せず、むしろ文字は音声を支持するために使用され、特に宗教実践のなかでは文字よりも音声に重要性が置かれることが明らかになってきた。これまでの研究では、東南アジア地域に広く見られるタトゥーが対象化されることはなかったが、文字と図像を身体に刻むタトゥー研究は書承文化の研究をさらに深化させる契機と位置づけることができる。

(3) **東南アジアの呪術**については、1990年代以降の商品経済や都市化が浸透した社会状況での呪術のあり方をめぐって一定の研究蓄積がみられる[Watson & Ellen. 1993, 白川・川田 (編)2012]。研究代表者も、これまで上座仏教の護呪経をモノや身体に宿らせることで呪力を発揮するような、東北タイの宗教実践を論じてきたが、従来の研究では、呪術の効力を信じない人々による呪術観の議論が不十分であった。そこで、賛否をめぐって社会的議論になりやすい、タイのタトゥーを中心に論じることで、従来の呪術研究の欠落部を埋めることが可能になると考えた。

(4) 研究代表者はこれまで東北タイの精霊信仰と呪術的諸実践の研究を行い、ピーと呼ばれる精霊が、人々の語りと宗教専門家の諸実

践を通じてリアリティを獲得し、「理解不可能な現実」を「受け入れ可能な現実」に再配置するプロセスを論じてきた。そのなかで、呪術専門家が古代クメール文字などの伝統的な文字と図像を用いることで呪具を製作する局面を分析してきたが、サックヤンと呼ばれる呪術的タトゥーでも、ほぼ同様の文字と図像が用いられることから、タトゥーの呪術的利用に関心をもつようになった。しかし、村落でタトゥーについて簡単なインタビューを実施したところ、必ずしも呪術に関心はなく、むしろファッション目的のタトゥーが増えていること、男性よりも女性にタトゥーを持つ者が増えていること、伝統的図案のみならず、他の地域や西洋の図案も同様に利用されている、などのタトゥーの新しい動態が伺えた。また呪術の場合とは異なって、タトゥーには否定的な立場を表明する人が多数いることにも気づかされた。現代タイにおける知識と価値観、ジェンダー関係の動態、およびタトゥーに内在す魅惑と暴力の両義性を明らかにできると考えたのが、本研究の当初の背景である。

## 【参考文献】

- Gell, A. 1998 *Art and Agency*, Oxford University Press.  
Kashinaga, M. (ed.) 2009 *Written Culture in Mainland Southeast Asia*, National Museum of Ethnology.  
Kuwahara, M. 2005 *Tattoo: An Anthropology*, Berg.  
レヴィ=ストロース, C. 1972 『構造人類学』みすず書房.  
オング, W. J. 1991 『声の文化と文字の文化』藤原書店.  
白川千尋・川田牧人編 2012 『呪術の人類学』人文書院.  
Watson, C. W. & Ellen R. (eds.) 1993 *Understanding Witchcraft and Sorcery in Southeast Asia*, University of Hawai'i Press.

## 2. 研究の目的

本研究は、現代タイにおけるタトゥーの社会的布置を、1990年代以降の経済発展に伴う急激な社会変容のもとで読み解き、タトゥーにおいて人を誘惑する力(魅惑)と人を恐れさせる力(暴力)の共在する状況を詳細に明らかにすることが目的である。

本研究の問題系は、(1)文字と音声、(2)呪術とファッション、(3)神秘性と反社会性の3つにわたる。

(1) **文字と音声の問題系**においては、サックヤン(*sakyan*)と呼ばれる呪術的タトゥーの特性を明らかにする。僧侶や在俗のイレズミ師(*acan sak*)が文字と図像を皮膚に刻んだあと、呪文を吹き込み、さらにイレズミを入れた者(*luksit*)が定められたタブーを守る

ことで、呪的な力を自らの身体に保持するとされる。ここでは、文字と図像、呪文という音声、ならびにタブーの3つの要素が、身体のなかで融合しており、身体が道具化される局面について分析する。

(2) **呪術とファッションの問題系**では、呪的な目的で刻まれるサックヤンと、ファッション目的でのタトゥーの関係について検討する。呪術的伝統の濃いサックヤンとは異なり、近年はハリウッド女優などの影響を受け、若い女性にファッション・タトゥーを求める者が増えている。だが両者のあいだに大きな差異はなく、村落部では、同じ僧侶・イレズミ師がクライアントの求めに応じてタトゥーを使い分けている。またクライアントとイレズミ師の間に築かれる師弟関係はサックヤンのみならず、ファッション・タトゥーでも同様に見られ、両者の差異だけでなく連続性を明らかにする。

(3) **神秘性と反社会性の問題系**とは、タトゥーを信奉する者と嫌悪する者の社会関係を問題にする。サックヤンおよびファッション・タトゥーを求める者はそれぞれ神秘力と魅惑する力を手に入れたと考え、タトゥーを嫌う者は、タトゥーを反社会性、暴力性の表れと考え、タトゥーの身体を醜悪なもののみならず、そうした社会関係から、タトゥーをめぐる相対立する身体観の複層状況を読み解く。これら3つの問題系を通して現代タイにおけるタトゥーの社会的布置を明らかにする。

学術的には、文字と音声をめぐる研究群に、身体を軸を加えることで、書くことが生成する力についての新たな研究視角を生み出すとともに、身体をめぐる研究群においても、文字のタトゥーという東南アジア特有の現象を分析することで、知識と身体との関係をめぐり新たな知見を提供する。さらに2013年9月にイレズミをしたマオリの女性が日本の温泉で入浴拒否されたことが話題となったが、同じくイレズミをめぐる賛否が分かる現代タイの状況を分析し、それを広く日本社会に発信することは、グローバルな状況下での自文化の捉え直しに繋がるという見通しの本研究を開始させた。

### 3. 研究の方法

(1) **平成26年度**は、文字と音声に焦点を当て、タトゥーを彫る主体である僧侶および俗人のイレズミ師を対象にして、インタビュー調査と参与観察を実施した。

フィールド調査は、平成26年8月6日～9月4日、12月25日～31日、平成27年2月10日～18日、2月25日～3月5日と4回にわたって、タイ東北部コーンケン県ムアン郡村落およびタイ中部ナコンパトム県寺院にて実施した。また文献調査としては、タ

トゥーや身体変工をめぐる文献、および文字と図像をめぐる人類学・社会学の文献を収集し、情報を精査した。

(2) **平成27年度**は、呪術とファッションの対照性に焦点を当てながら、前年度にインタビュー調査を実施したなかから選定した彫り師である僧侶とパラモン修行者リシ(ruesi)のもとで、彼らの活動について情報を引き続き収集するとともに、クライアントを対象としながらインタビュー調査、アンケート調査、参与観察を行った。

フィールド調査は、平成27年8月13日～9月10日、平成28年1月11日～18日の2回にわたって、タイ東北部コーンケン県ムアン郡などの村落、マハーサラカム県チェンユーン郡村落、タイ北部チェンマイ県ムアン郡村落などで実施した。

(3) **平成28年度**は、タトゥーのもつ聖性と反社会性をめぐって、前年度までの特定のインフォーマントのもとでインタビュー調査を継続するとともに、僧侶やイレズミ師などと同じ地域社会に居住しながらも、タトゥーに否定的な見解を持つ住民からもインタビュー調査を実施した。またタイのタトゥーを他地域と比較する目的から、ミャンマーで簡単な調査を試行するとともに、カナダ・トロントで開催されたタトゥーに関する国際的な展示(Tattoos: Ritual. Identity. Obsession. Art., Royal Ontario Museum)を観覧し、オセアニア地域や欧米地域との比較のなかで、タイのタトゥーを捉える視点について新たな知識を得た。

フィールド調査は、平成28年8月8日～22日に、タイ東北部コーンケン県ムアン郡およびミャンマー・ヤンゴン市にて実施した。またカナダ・トロントには7月1日～7月3日まで滞在し、博物館の展示を中心に調査を実施した。

### 4. 研究成果

(1) **タトゥーの図案と文字**：タトゥーを施す寺院などでクライアントが図案を選ぶための冊子などから、図案とその効果を収集した。一例を挙げるなら、ノック・サーリカー・リントーン(金色の舌をもつ伝説上の鳥で、語りかけることをすべて信じさせる)、プーライ・ブワック(白ウナギで、敵に捕まえられたときに逃げることができる)、パヤー・ガイ・トゥワン(偉大なる鶏を意味する。闘鶏で掴んだ鶏を勝たせることができる)などである。また図案と価格についても情報を収集した。

(2) **タトゥーの道具**：現在用いられている道具、および過去に使われていた道具についての情報を収集した。木製、金属製、機械式など道具は多様でありながらも、多くは自作で、使用者がカスタマイズしている。最も多く用

いられていたのは、ケムサックと呼ばれる木製または金属製の棒に針を取り付けたものである。感染症を防ぐ目的から、針は取り替え式である場合が多く、またインク壺も使い捨て型のものが用いられている。

(3) **タトゥーの実践**：ナコンパトム県のBP寺、およびコーンケン県ムアン郡の複数村落において、タトゥー実践の現場を観察した。またタトゥーの分布状況について具体的なデータを得るために、氏名、学歴、タトゥー歴、身体の箇所、動機などの基本的情報に関するアンケート調査を実施している。まだサンプル数が少ないが、現段階では、タトゥーを求める人々は20代前半未満、および50代後半以降に集中していることがわかった。



写真1 村落でみられる呪的タトゥー

(4) **ナコンパトム県のBP寺**：ナコンパトム県のBP寺のタトゥー実践は、次のとおりである。故人の僧侶ルアンポー・プーン師 (*luang pho poen*) が有名で、いまでもプーン師を記念する呪具が寺院内で多く売られている。寺院には40人ほどの僧侶がいるが、そのうちイレズミを行えるのは8名ほどで、俗人イレズミ師も5人ほど関わっている。彼らのすべてが寺院でイレズミを学んだ者である。

BP寺院では、20歳未満に対してイレズミを行わない。男女比は2：3ほどで女性の方が多く、年齢は20代の若者が圧倒的に多い。魅力を高めるタトゥー、身体を防御するタトゥーの人気の高い。雨安居中でもタトゥーは行っているが、僧侶に対するタトゥーは行わないという。1日あたりのクライアントは40～50人で、毎朝7:30から夕方16:00まで受け付けている。

タトゥーを行う建物は3階建てで、1階と2階では20パーツほどでイレズミを行う。針やインク壺は交換していないが、タイ人の若者を中心にクライアントは絶えない。3階では価格が1,000パーツを超え、顧客ごとに針およびインクを交換している。外国人はこちらでイレズミを行う寺院のタトゥーはいずれもサックヤンであり、作業終了後、僧侶

が呪文を吹き込んでいる。



写真2 BP寺院で売られる入墨Tシャツ

(5) **色のないタトゥー**：通常のイレズミと異なって油を擦り込むのがサックナンマン (*sak namman*) である。サックマイミーシー (*sak mai mi si*) とも呼ばれ、「色のないタトゥー」を指す。人目に触れるタトゥーでは、仕事に差し支え、国外に出るときに面倒なので、色のないタトゥーを求めることがある。

ケムサックと呼ばれるイレズミ用の長い針を使うのではなく、レックチャーン (*lekcan*) という貝殻に文字を彫るときに使う筆記用具を用いることもある。この場合、レックチャーンで皮膚をひっかいて傷を付けるので、通常のタトゥーよりも痛みが激しいと経験者は語る。流派によっては、最初に入れてから1週間ごとに7回行わないといけない。彫り込むのは呪文であり、タブーが伴ってくる。通常は目に見えないが、酒を飲んだとき、怒ったときなどに、イレズミが赤く浮かび上がることがあるという。

(6) **呪文が刻まれるモノ**：呪術タトゥーの呪文や文様は、モノに書き込まれることで護符や呪具として用いられる。

文字が刻まれた代表的な呪具は、ガトゥット (*katut*) やタクフルット (*takrut*) と呼ばれる護符である。タトゥーと同様に古代クメール文字 (*akhara*) を金属板に刻み、丸めたものに紐を通すなどして携帯する。

すべての呪術師が制作できるわけではなく、口承で伝えられた呪文を古代クメール文字で記述する知識が不可欠で、それによってより多くのクライアントを獲得することができる。

バラモン修行者が制作する呪具はワトゥ・アタンと呼ばれ、アタルヴァヴェーダに由来するとされる。クマントーンやルークテープなどの呪物とともに制作され頒布される。

バンコクなど都市部においても、ショッピ

ングセンターや市場において、呪術的な文字が刻まれた道具が売買されている。バンコク近郊の複数のショッピングセンターや市場にて、護符や呪具の流通をめぐって調査を行った。仏教的な道具というポジティブな力と、呪術的な道具というネガティブな力の両方が、同一の空間で棲み分けながら取引されている様子を確認した。

(7) **呪文の吹きかけ**：イレスミを聖化する際に行う動作はパオ (pao) あるいはセーク・カーター (sek khatha) と呼ばれる。セーク・カーターとは、文字どおり「呪文を吹き込む」ことであり、身体に刻みこんだ呪文のイレスミを聖なる状態に変える、つまりアクティベートするために不可欠な作業である。

これと同じ所作は伝統医療のなかにも見えてとることができる。ヘビ毒などの治療や骨折・捻挫などの治療のさいに、体の内部に侵入した毒ピット (phit) を体外に排出するための所作として認識されている。イレスミやヘビ毒咬傷だけではなく、ある種の薬の力を強めるための所作としても認識されていることが明らかになった。ヤーモンと呼ばれる塗り薬やヤムワイと呼ばれるマッサージオイルなど、油を原料とするような伝統的な薬であれば、たとえそれが市販薬であってもセークカーターを施すことができるという。呪文を吹きかけるといふ所作はタトゥーの力の活性化だけではなく、ある種のモノの力を強めるために用いられていることがわかった。

(8) **タトゥーを嫌う人々**：村落ではタトゥーを入れる僧侶がいるが、多くの村人はタトゥーを嫌っている。嫌うのは、「美しくないから」または「反社会的だから」である。「タトゥーがあると工場での仕事に雇ってもらえない」、「公務員になれない」などとも言われる。また実際に僧侶の止住地に訪ねてくる人びとの多くは、社会の中心から外れた人物が多い。学校教育を中退したりする若い男女がほとんどである。また装いや振る舞いも多くの礼儀正しい村人とは異なって、悪ぶった風を見せる。そうした様子からタトゥーの反社会性を多くの村人が感じ取って、嫌悪感を示すことも多い。

(9) **バラモン修行者リシ**：コーンケーン県、マハーサラカム県では、特定のバラモン修行者リシの僧院 (asom) を頂点として、リシや宗教職能者モータム、僧侶をめぐる系譜について情報を得ることができた。特に東北タイにおける呪術的知識のネットワークをめぐっては、3人のリシが中心的役割を果たしていることが明らかになった。彼らの間では、年に一度の儀礼を通じて強化される師子関係を通じて、知識と力の正当化が図られている様子を見ることができた。

コーンケーン県のあるリシの修行所では、

毎週の仏日に行われる読経会に参加した。15人ほどが参加する読経会では、30分ほどの読経ののち、リシや参加者が毎回憑依を体験する。リシの信仰と憑依儀礼の関係については



写真3 コーンケーン市の隠者

さらなる検討が必要である。

(10) **タイ国の周辺のイレスミの状況**：これまでの調査で、北タイでは強力なイレスミの出所としてミャンマー起源が語られていた。またミャンマーのシャンの人々を中心に、女性や未成年へのタトゥーが現在も実践されている。特に女性では、蛇や犬の咬傷除けの呪的タトゥーが多く見られることがわかった。

国家を越えたイレスミのグローバルな展開を知るため、ミャンマー・ヤンゴン市において、シャン系寺院やタトゥースタジオでインタビュー調査を行い、現代ミャンマーの都市部で実践されているイレスミの状況の情報を得ることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

津村文彦、「ルークテープ人形の流行 人形向け航空券の販売報道をめぐって」、『東南アジア学会会報』、査読無、105号、2016、p.32.

津村文彦、2016「美しくも、きたないイレスミ タイのサクヤン試論」、『年報タイ研究』、査読有、16号、2016、pp.39-60.

津村文彦、「書評へのリプライ：櫻井義秀 (津村文彦著『東北タイにおける精霊と呪術師の人類学』)」、『宗教と社会』、査読有、22号、2016、pp.98-99.

津村文彦、「注射と吹きかけ 東北タイにおける注射医と呪医の治療効果をめぐって

て、』、『コンタクト・ゾーン』、査読有、  
vol.7、2015、pp.167-191.  
<http://hdl.handle.net/2433/209804>

津村文彦、「呪術師に变身！ 東北タイに  
おけるパーサバイ 』、『月刊みんぱく』、  
査読無、38巻10号、2014、pp.22-23.  
[http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/showcase/bookbite/gekkan/1410\\_22-23.pdf](http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/showcase/bookbite/gekkan/1410_22-23.pdf)

〔学会発表〕(計6件)

津村文彦、「東北タイにおける食物禁忌と  
身体の不調 ピットサムデーをめぐ  
るコミュニケーション 』、中部人類学談話  
会第236回例会、2016年9月17日、南山  
大学名古屋キャンパス(愛知県・名古屋  
市)。

津村文彦、「ルークテープ人形の流行  
人形向け航空券の販売報道をめぐって 』  
(パネル「メディアを通じた文化表現の地  
域性を考える」)、東南アジア学会第95回  
研究大会、2016年6月5日、大阪大学豊  
中キャンパス(大阪府・豊中市)。

津村文彦、「見えないタトゥーをもつこと  
東北タイにおけるサクヤンにみる可  
視と不可視 』、日本文化人類学会第50  
回研究大会、2016年5月29日、南山大学  
名古屋キャンパス(愛知県・名古屋市)。

TSUMURA, Fumihiko, "Mechanism and  
efficacy of magical treatment of  
shingles in northeastern Thailand",  
The International Union of  
Anthropological and Ethnological  
Sciences (IUAES), Inter Congress 2016,  
2016年5月7日、Dubrovnik (Croatia)。

津村文彦、「書評セッション 津村文彦著  
『東北タイにおける精霊と呪術師の人類  
学』(評者:村上忠良)』、日本タイ学会第  
17回研究大会、2015年7月12日、東京学  
芸大学(東京都・小金井市)。

津村文彦、「パオで治るといふこと 東北  
タイの呪医の治療実践の効果をめぐって 』、  
京都人類学研究会7月季節例会シンポジ  
ウム「呪術的実践=知の現代的諸相 科学  
/医療/宗教/その他の実践=知との並存  
状況から 』、2014年7月12日、京都大学  
人文科学研究所(京都府・京都市)。

〔図書〕(計4件)

津村文彦、大阪大学大学院言語文化研究  
科、「『書かれたもの』をまとう 東北タイ  
のタトゥー試論 』、村上忠良(編)『宗教実  
践における声と文字 東南アジア地域か

らの展望 (京都大学地域研究統合情報セ  
ンター共同研究 平成25年度~27年度 研  
究成果論集)』、2015、pp.13-25。

津村文彦、出版社めこん、『東北タイにお  
ける精霊と呪術師の人類学』、2015、p.309。

津村文彦、風響社、「ピーの信仰をめぐる  
複ゲーム状況論 』、杉島敬志(編)『複ゲー  
ム状況の人類学 東南アジアにおける構  
想と実践』、2014、pp.179-212。

津村文彦、明石書店、「精霊信仰とシャ  
ーマニズム 』、綾部真雄(編)『タイを知るた  
めの72章【第2版】』、2014、pp.178-181。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)  
取得状況(計0件)

〔その他〕(計3件)

津村文彦、2015年5月23日放送(FBCラ  
ジオ)、「呪術師と私」(「FBCラジオキャン  
パス」)

津村文彦、「注射と吹きかけ イサーンの  
伝統医療にみる効果 』、第123回さばえ  
ライブラリーカフェ、2015年5月19日、  
鯖江市文化の館(福井県・鯖江市)。

津村文彦、2015年5月16日放送(FBCラ  
ジオ)、「吹きかけで病を治す」(「FBCラジ  
オキャンパス」)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津村 文彦(TSUMURA, Fumihiko)  
名城大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 40363882

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし